

祈り：暗夜を生きる希望の光

片山はるひ（ノートルダム・ド・ヴィ）

<http://www.ndv-jp.org/>

(Notre Dame de Vie:Youtube チャンネル)

1) 祈りとは？

祈りとは、「自分が神から愛されていることを知りつつ、その神と二人だけで、たびたび語り合う親しい友としての交わりにほかなりません。」

(アビラの聖テレサ、教会博士)

2) 聖年：希望の巡礼者

希望の扉を通る意味：キリストという“門”へ向かう巡礼と回心の決断を、見える形で表すしるし。聖なる扉は、主イエスが「わたしは門である」(ヨハ 10:9) という福音に基づく象徴。聖年はその“門”を通して主との交わりへ入る時、「そのとき神のあわれみを受けて、自らもあわれみ深く生きる力を得る」(教皇フランシスコ)

わたしの心のうちに 輝いている光のほかには
わたしは微もなく 光ももたなかった。
けれどもこの光は真昼の光よりも確かに
わたしを導いていた。わたしを知り抜くあの方が待
つておいでになるところへ
おお わたしを導いた夜よ！ おお あかつきより
明るい夜よ！ 『暗夜』 十字架の聖ヨハネ

3) 信仰は「暗夜」

・感覚と知性にとっての「暗夜」。信仰があることとは、イコール感じること、理解することではない。信じるとは、自分が信じるものに信頼し、委ねること。ふくろうのたとえ。

・愛である神を、わたしたちは、感覚でも、知性でもとらえることはできない。この暗夜において神とわたしたちは考えによって交わるのではなく、愛によって交わる。

「信仰によって与えられる極度の光が、霊魂にとっては闇となる。(…)それは、あたかも、太陽が輝き、われわれの弱い視力をおしつぶしてしまうと他の光は太陽の輝きのため、もう光とは見えなくなるようなものである。(…)このように、信仰の光は、あまりにも大きいため、理性の光をおさえ、打ち負かしてしまうのである。」(『カルメル山登攀』第二部 3 章)

4) 親と子どものたとえ

・神の教育法：赤ちゃん時代から子ども、そして大人の信仰への移行

5) 「暗夜」を生きる意味

・私たちの欠点、失敗、辱め、親しい者の死、病気、老い、などすべての試練、苦しみはそれを信仰において受け入れる時、わたしたちを浄め、変えてゆくための機会となる。神の外側にあるものは何もなく、すべては神の御手の中にある。神は、私たちを浄め、愛するものとされるために、色々な試練を利用することがおできになる。

・ドゥヴォー『本質的なことは、わたしたちの生活に何が起こるかではなく、起こったことに対して、私たちが何をするか、神に何をおさせするかということ。』

・私たちが最も傷ついているところは、最も開かれてりうところ。神が私たちの魂の中にお入りになるのは、私たちの傷を通してであって、私たちの力を通してではない。

・愚かで無益に思えた苦しみは、主によって、ただその本人を救うばかりでなく、多くの人々の救いに役立つ十字架に変えられる。

(『十字架の聖ヨハネによる暗夜について』 ウィルフリード・スティニッセン)

参照 ヨハネパウロ2世『サルヴィフィチ・ドローリスー苦しみ of キリスト教的意味』
サン・パウロ)

6) 聖母マリア：暗夜に立つ母

・聖母マリアは、「信じる者の母」

・光を最も豊かに与えられた方であるからこそ、最も深い信仰の闇を経験した方。

・その頂点は、十字架の下で立っておられた時。『聖母以上に暗夜を深く知った人はいません。だれも彼女ほどには、神の神秘の深みにいませんでしたから。』

7) 「夕べに私たちは愛について問われるだろう」十字架の聖ヨハネ

・マタイ25章で問われていること。

Love in action, あなたはこの人生で実際に、具体的に愛したのか？

・天国とは、愛である神と共にいる状態

・地獄とは、エゴイズムに閉じこもり、神とも人とも愛の交わりを自ら断ち切ってしまった状態。

・「祈り」：神とのかかわり、交わりがあるならば、人生において常に希望がある。

祈ることは、暗夜を歩むための灯火。嵐の中の舟の錨（聖年のロゴ）

